
aiolos

エンノイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a i o l o s

【NZコード】

N9070V

【作者名】

エンノイア

【あらすじ】

離婚した母親と暮らす、じく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「ブネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、未知の国、アイオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出会い、数奇な運命に巻き

込まれていく…。

第一話 選ばれし少年

♪ 2 9 7 1 6 — 3 7 8 1 ♪

「王よ、どうされました？」

側近だらうか。ゆつたりとしたローブをまとつた青年が尋ねる。腰まで伸ばした髪は水色、先のほうで緩く束ねられている。

「この国に闇が迫つてゐる……。新しい王を見つけなくては」ベールをかぶつた女性が、水晶に手をかざす。ここからではよく見えないが、何かが映し出されたりし。かぶつたベールから、先ほどの青年と同じよう、水色の髪がのぞいている。

「アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国的新しき王となるべき人間を！」

不思議な夢を見た。ビニカの国の王様が、新しい王を探すのだ。

♪♪♪……。♪♪♪……。

「ねむこな……。

耳元で田覚まし時計がけたたましく音をたててゐる。

♪♪♪……。♪♪♪……。

わかつたよ。起きるよ……。

僕は、しきりに落つてつぶれる上まぶたと鬪いながら、田覚まし時計に手をのばした。

「……？」

下りない。
というか、すでに下りている。

多くの田舎まし時計がそうなように、僕の田舎まし時計はセットするときはレバーを上に上げ、止めるときは下げる、という仕様になっている。

だが、レバーはすでに下りてゐる。なのに田舎まし時計は鳴り続
けてゐる……。

「わふつ！！」

突然、顔に変なものが当たった。モサッとかワサッとかいう感触。黄色い羽根が舞い散る。

羽根
…
?

「ペーパー！」

「うーん、でもよひやく田が覚めた。音をたてていたのせ田覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。

昨日、目覚まし時計をかけ忘れたんだな。

僕の田の前にいたのは、トサカのように羽がピンと立った、黄色い鳥だった。僕の顔に突進してきたソイツは、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。

種類は何だろつ。インコのようにも見えるが、大きさは僕の顔ほどもある。よく知らないけど、オウムとかの類いかもしね。だいたいなんで僕の部屋に鳥が……？

「エンノイアー？」起きてるんだつたら下りてきなさい」「

「あ、はーい！」

ちょっと迷つたが、その鳥を肩にのせると、僕は一階へ下りた。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。階段を下りてきた僕に気づくと、振り返つて言つた。

「あら、その口、気に入った？」

「えっ！？ 気に入った、つてことはまさか……」

まさか、母さんが僕に？

すると、母さんは満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたについて。」

……僕は心底がっかりした。

だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね～ 今度会つたらお礼言つのよ

ハア……。

とりあえず、自己紹介をしようと思つ。

僕はエンノイア・グノーヴァー。13歳。半年前に私立の中学に入学したばかり。両親は離婚していて、今は母さんと一人暮らし。父親については……あんまり話したくないな。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合つて三年ほどになる。母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……。僕はロバートのことがあまり好きじゃない。

「ところでエンノイア」

「うん？」

今日の朝食はパンとローンフレーク。バターを塗つたパンにかぶ

りつきながら、母さんの言葉を待つ。

「今日は早く帰つて来てね。大事な話があるから……」
妙に意味深な表情で言つ。

「う、うん……」

何だろ? う。

「へえ、いいなあ!」

「うん。デュークって名前にしたんだ」

ここは中学校の教室。

今話しているのは、ステイーブといつて、クラスで一番仲のいい友達だ。

「そうそう。あの鳥、飼つことにしたんだ。名前はデューク。

「それにしても、ロバートからもらつたつていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこ見せたいだけなんだ」
すると、ステイーブが聞いた。

「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ? 僕、この前、お前んちに行つた時会つたけど、いい人そうだったじゃん」
「どうしてわけじゃないけど……」

自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「ははーん。ヤキモチだな」

「ヤキモチ？ ジハコウ」と。

「お前はそのロバート、『母ちゃんを取られるのが怖いんだ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ』

「『は……違つよ…… そんな、子供じゃあるまこ』」

「ほら、席に着け。授業始めるぞ」

力チカチカチカチ。

時計が9時10分を指している。呆然と時計を眺めながら、考える。

ヤキモチなんかじゃないけどさ……。

なんていうか、ロバートには男らしさがないんだよ。いつもへらへら笑つてゐるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか……。

「……ノイア」

「？」

誰かに名前を呼ばれたような気がした。

あたりを見回してみたけど、先生は相変わらず教科書を読んでいるし、他の生徒が呼んだ氣配もない。氣のせいかな。

「……エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。ふと、窓のぼりを見ると

「……。

「デューク……」

なんと、教卓の横にある窓の外に、デューコークがとまっていた。窓ガラスをくちばしでたたき、侵入を試みている。なんか、いやな予感……。

パリン――

デューコークはくちばしで窓ガラスを割ると、またまた嬉しそうに、僕のほうに飛んできた。

「デューコーク！ どうしてここに？」

デューコークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。

「エンノイアくん……。それは君のペットかね？」

見上げると……最悪なことに、デューコークは先生の頭の上に大変な落とし物をしていた。

「あーあ！ しまられた、しまられた」

あの後、僕は2時間みっちりお説教を食らった。（僕が連れてきたわけじゃないんだけど）

デューコークは何食わぬ顔で飛び回ってるし。

そうだ。今日は早く帰れって言われてたんだつけ。すっかり遅くなっちゃったな。

僕は家の玄関のドアを開けた。すると……。

(ロバート……！？)

居間でロバートと母さんが話している。普段は化粧もしない母さんが、今は髪をたらして、妙にめかしこんでいる。

「なんだ。ロバートが来てたのか」

何だか無性に腹が立ってきて、僕はそのまま居間を素通りして、一階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、

「エンノイアー？ 帰つてるんだつたら、こっちへ来なさい！」

母さんに呼びとめられてしまつたので、僕は仕方なく居間へ向かうことにした。

「やあ、エンノイアくん、久しぶりだね。おや？ その鳥は。よかつた、気に入ってくれたんだね！」

僕は、デュークを肩に乗せたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。

「別に。こんなもの、もうつたつて、迷惑だよ」

「エンノイア！！」

母さんがヒステリックに怒鳴りつける。

「あはは。そもそもそうだね。悪かったね」

これだ。ロバートのこつこつこつが腹立つんだ。たまには怒つてみればいいのに。

「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」

「で？ なんなのさ。大事な話つて」

イライラしてきたので、母さんの言葉をさえぎつて聞いた。

「あ、それがね。私たち……結婚しようつと想つの」

「え……？」

「結婚……つて……、どうして……？」

最後の方はほとんど声にならなかつた。

「どうしてって。あんただつて私たちが付き合つてゐる」と知っている
でしょ。」「

「もうこいつと言つてゐるんじゃなによー。」

ロバートと母さんが、面食らつた表情でじつを見ている。

「じつはいんなやつと結婚するんだよー。母さんはいつもそうだ
！ ちよつと優しくされたらすぐその気になつて。じつだつて、
結婚したら父さんみたいに豹変するに決まつてる。こいつが新しい
父親だなんて、僕は認めないからねー。」「

無我夢中でそう言い終わったとき……。

ピシャッ。

頬に鈍い痛みが走る。

母さんが僕の頬を叩いたのだ。

「レナー！」

ロバートが慌てて母さんを制止する。

「あんたはどうしてそういうわからず屋なの……。そりや、いきなり
『この人が新しい父親です』なんて言つても、無理だと思つ。だけ
ど、あんたは一度でもこの男性のことを理解しようとしたことがあ
るのー？ ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張つて
のこ……」

「よせないか、レナー！」

ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。

「ともかく、座つてゆつくり話そつ。ま、ほんのいアくんもこ
ちこおいで」

「……いだ

「え？」

「母さんなんて大っつ嫌いだ――――――！」

バタンッ！

「あ！ エンノイア――！」

僕は、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。

……どうしてあいつなんだよ。

母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのは僕なのに。

街の人たちが驚いて、駆けている僕の方を見る。でも、気にもとめず走り続ける。

やっぱりヤキモチなのかもしれない。でも、怖いんだ。母さんが僕よりもバートの方に行っちゃうのが。

お願いだから、僕を一人にしないでよ。

涙がこぼれてきた。それをこまかすように、僕はひたすら走り続けた。

……十分ほど走つただろうか。ふと気づくと、僕は川原に立っていた。

川原の周りに立つ木々の葉が、寒そうに揺れてい。まだ、春というには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。

.....「一トを着てくれれば良かつたな。

少し冷静になつて、あらためて考へる。
これからどうじよひ.....。

今すぐ家に帰るわけにはいかないし.....。

いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配せんせいやひ。
そう思つたとき.....。

「... ハンノイア」

いつかも聞いた声が、僕の名前を呼んだ。
そうだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰ー？ デニから話してゐのー？」

僕は宙に向かつて聞いた。

あたりには誰もいない。近くの木の枝に、デュークがとまつているだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。

「我が名はアイオロス。お前はあの男から母親を取り戻したいのだろう？」

「！」

「取り戻す」という言葉に、僕の心は動搖した。

それに、なぜ声の主はそんなことを知つてゐるんだ？

「と、取り戻したいだなんて.....。僕は別に.....」

「隠さずともよい。私にはお前のことがわかっているのだ。」

僕のことがわかつてゐる？

一体誰だというのだろう。

すると、壇の主がどんなことを言つ出した。

「その願い、かなえてやるわ。」

「ほんとこー?」

「ただし、条件がある。アイオリア国の人、国王が持つ、『ブネウマの鏡』を翻つてほしい。そうすれば、願いをかなえてやるわ。」

アイオリア? まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。

「アイオリアって……そんな国どこ……?」

そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさで、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れの音も消えていく……。

そのうちに、僕の意識は遠のいていった……。

第一話 選ばれし少年（後書き）

はじめて投稿します。
よかつたら感想等、聞かせてください

第一話 森の狩人

> i 2 9 7 1 7 — 3 7 8 1 <

サワサワサワ……。

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。そつと田を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かつた。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。

「森！？」

とっさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。

「川原にいたのに……どうして森に……？」

僕の町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考へても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ガサツ。

ふいに、背後で物音がした。

「な、何……！？」

身をこわばらせて、次の反応を待つ。

フー……フー。

何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。

おそるおそる後ろを振り返る。すると、一匹の獣が僕の目に映つた。

角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、僕が今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、僕の身長と同じくらいだろうか。

背に、亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様の隙間から、雑草が生えている。その姿が、なんとも滑稽で、愛らしいと言えなくもない。

しかし、今の僕に、愛らしいなんて言っている余裕はなかつた。どんな危険な生物か、わからないからな。僕とそいつとの距離は今、一メートルにも満たない。

とはいへ、見るからに愚鈍そうな獣だ。刺激しないよ、静かに後ずさる。そうして、そつと立ち上がつた時……。

ザツザツ！

僕の動きの何が気に入らなかつたのか、そいつは前足で勢いをつけると、いきなり僕に向けて突進しだした！

「うわああああああああああああああああああああああああああ

もはや気が気じやない。僕は意味不明な言葉をわめきながら、森の奥へと走つた。だが、獣はしつかり僕の後を追いかけてくる。突然、何かに蹴つまづいた。あわや転ぶといつところで、もう一方の足でなんとか踏みとどまる。見ると、地面上にロープのようなものが這わせてあるが……？

すると、今度は頭上から木の杭がふつってきた！ それも何本も何本も。円を描いて落ちてくるので、僕はその円の中心に避難した。ふつてきた木の杭は、先がとがつているので、うまい具合に地面上に突き刺さつていく。

ようやく、木の杭の落下がおさまつた。幸い、この木の杭におびえて、獣は追跡をやめたようだ。グルル……と喉を鳴らしながら、二、三メートル離れた場所から僕の方を見ている。

ハアアアアアア……。

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に、果物の束のようないいのがぶら下げる。自然に生えたものではない。果物の束を網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げたようだ。

そうか、罠だつたんだな。よく見れば、木の杭のあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると、地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から、網をはつた木の杭がふってきて、獣を取り囮む。と、まあ、そういうことだろ？ それにしても、誰がこんな仕掛けを作つたんだろう。

「伏せろ！！」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えつ！？ 伏せろつて……！？

「ガアアアアア！！」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて、今にも僕に飛びかかるうとしている！ いや、僕に飛びかかるうとしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか？ どちらにしても、危険な状況であることに変わりはなかつた。

「伏せろつて言つてるだろ！」

そ、そつか。伏せるのか……。

僕があわてて頭を下げる、僕の頭のてっぺんの毛をかすめて、何かがものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまつすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ！ 誰かが木の上から矢を放つたらしい。

さらに一本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながら、しばらく暴れていたが、やがて横に倒れると、動かなくなつた。

おそるおそる木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもつた……少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年は僕よりも少し上のようだ。16～17歳と

いつたところだろう。黒いベストの上に、皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣、ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、僕を驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかつた。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロンドとでもいうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によつて銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

僕が少年の方をぼうつと見ていると、彼が口を開いた。

「あーあ、罠を台無しにしやがつて。生け捕りにし損ねたじゃねーか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かつた。この罠は、彼が仕掛けたものだつたのだ。さつきの変な獸を捕まえるために。それが、僕のせいに失敗してしまつたのだろう。

だけど、僕だつて必死だつたんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」
僕が話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そして、僕の前に歩み寄ると……。

??

網ごしに、僕の顔をじいつと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」
「……かわいいな」

僕は、混乱した。

か、かわいいって……。確かに、クラスの女の子に「エンノイアくんつて、かわいい～！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは、男には言われたくないっていうか……。

僕が一人でざきまきしているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？ 羽？

僕に羽なんかあつたか？

「ひやつ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があつた。目の前に黄色い羽根が舞つた。

そうだ、黄色い羽根といえば……！

「デューク！！」

なんと、そこにはデュークだつた。いつの間にか、近くにいたらしい。

毎度のことながら、神出鬼没だな。こいつ……。

でも、よかつた。ここがどこだかわからないけど、一人じゃないつてだけで、ずいぶんましだ。

「それで、ここは一体どこなの？」

僕は、目の前の少年に問い合わせた。ちなみに、僕はさつき、ハマつていた罠から出してもらつていた。

「何だ、お前よそ者か？ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」

「アイオリア！？」

僕は、耳を疑つた。

アイオリアって。そう、確か、あの天の声が言つていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、僕に課せられた条件。

「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を壊せ、と……。僕はその、聞いたことのない国、アイオリアに来てしまつたというのか？

僕が一人考えていると、弓の少年は、ブーツにさしていったナイフを取り出し、さつき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。

「な、何をしてるの？」

突然の行動にぎょっとした僕は、聞いてみた。

「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら、畜として高く売れるんだが」

一
え
・
・
・

この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。

それはともかく、僕は再び考えた。あの、天の声。アイオロスとか言ってたつけ。あいつが、言つていたことだ。

「…………。」

国王つて都にいるものじやないのかな

よし
決めた！

「なんだ？」
「二つとも、部屋で重い一歩つてあるから」という感じで少年が振り返る。

ド テ ツ。

少年がわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。
「なんだそりや！　勝手に決めんな！　だいたいなんで俺がお前を
都に連れてつてやらなきゃいけないんだ！」

彼がもつともなことを言った。でも、僕は

「お願い！！ 僕は、どうしても都に行かなきゃならないんだ。でも僕は道もわからないし、さつきのやつみたいな化け物も倒せないし……」

だめだな

少年は、あいつと結定した。

都に行くなめなんですか？仕事も手伝はよ！

なおも餘し下かなか

「うう、問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし、たま

少年が僕の襟首をつかんだ。

「……俺は人間つてのが大嫌いなんだ。とつとと失せろ。俺がお前

「じゃあな。モンスターと魔物に気をつけろ」

そう言つて、少年は立ち去つてしまつた。一人取り残されて、デュークと顔を見合わせる。（こいつ、人間みたいな動きをするんだ）いけそうだつたのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だつたし。それに対し人間が嫌いって……じゃあなんで僕を助けてくれたんだろう？

まあ、考えても仕方ないか……。僕は、とりあえず歩き出すことにした。

「こいつが、最南端つて言つてたな。北に歩けば森の外に出られるだろ？ 今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西。ということは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

僕は、とりあえずそう考へることにして、この見知らぬ大地を歩き始めた……。

つづく

第一話 森の狩人（後書き）

よかつたら感想等、聞かせてください

第二話 暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなつた。

しかし、一向に森から出られる気配がない。

方向が間違つていたんだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとう僕は、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまつた。

「ピペッ」

デューグが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「デューグ……。お前、飛べるんだから、どうなつてるのか見てきてよ」

通じるわけないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデューグは「わかった!」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行つた。

しばらくして、デューグが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピペッ！ ピイ！ ピペッ！」

「な、何？ なんて言つてるの?」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、僕にはさっぱりわからない。

僕が鳥の言葉でも話せればいいんだけど……。

「あ！ デューグ！ ！」

しひれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

「デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、僕のことを見捨ててしまつたんだろうか。

そりや、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経つてないんだし。さほど、なついてるつてわけでもなかつた……かもしけない。

だけど、デュークまでいなくなつてしまつと、僕は本当に独りぼつちだ。

真つ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のようなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言つてたつて。「モンスターと魔物に気をつけ」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……つて何だらう。

たくさん恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

（そんなもの、いるわけない……）

僕はあわてて頭からそれらのイメージを振り払つと、暗闇から、明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であつたことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちやんと、話しかねばよかつた。母さんと、ロバートと。

僕……、何やってるんだろ？

何だか、悲しくなってきた。すうぐ……みじめな気分だ。

僕が落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。
デューコークだ！ きっとデューコークが戻つてくれたんだ！

僕のことを見捨てたわけじゃなかつたんだ！

「デューコーク！」

嬉しくなつて、振り返る。

しかし、僕の目に入つたのは、デューコークではなかつた。
背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い一いつの光のセットが、
森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいつそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひつ……！」

僕は恐ろしくなつて、その場を立ち去るひつと、駆け出した。
と、その時……！

「うわあ……！」

黒い塊が、僕に向かつて大量に飛んできた。羽音の正体は、無数
のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、僕にまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こう集団でこられるとなつた

まったくもんじやない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをは
がそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、ま
とわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。
絶え間ない攻撃と、息苦しさに、意識がもつれはじめてきた……。

僕、死んじやうのかな。

「こんな、わけのわからない場所で？　母さんと仲直りもできないまま？」

そんなの、嫌だッ……！」

必死に叫んだが、声にならなかつた。

ヒュッシュ。

突然、一、二、三個の石ころが飛んできた。すると、「ウモリたちが一斉に僕から離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行つたようだ。

一体、どうなつてゐるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになつてしまつた体を起こすと……。

「まつたく。見てらんないな。『ブテラス』とくに死にそつな顔いやがつて」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会つた少年だつた。しかもその肩には、『デューク』がつてゐる！

「ブテラスは動くものを追う性質があるからな。出合つたら、あんまり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さつきの「ウモリ」のことを「ブテラス」と言つてゐるのだとわかつた。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？　それに、『デューク』も……」

少年は、こともなげに答える。

「さつき、こいつと会つたんだよ。聞けば、お前が道に迷つてゐて言つからさ」

僕は啞然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるのだろう？

僕には、『デューク』が何を言つてゐるのか、サッパリだつたのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、僕の肩に飛び移つた。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、僕はあることに気がついた。

「じゃあ、僕が道に迷つて聞いて、わざわざ助けに来たの？
人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかつたらしい。
彼の顔がみるみる赤くなつてきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事が
あつて……」

嘘だな。

顔を真つ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。
その様子が無性におかしくて、僕は吹き出してしまつた。

「な、なんだよ！ 何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒ
ーヒー、涙を流しながら、笑い転げる。
緊張の糸が解けて、僕は……笑いが止まらなかつた。

夜の暗闇の中に……僕の笑い声が、ひときわ大きく響いた。

つづく

第三話 暗闇の中で（後書き）

よかつたら感想等、聞かせてください

田の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。

小さく刻まれたキノコが浮いただけの、實に質素なものだが、それでも今の僕にはご馳走に違ひなかつた。

目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。

僕は、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアのことを思い出していた。

もつとも、あの時のキャンプファイアはもつとずっとにぎやかだったけれど。

今は、肩の上でうつらうつらしているデコークを除けば、隣に少年がひとり座つてゐるだけだ。

まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のよつと美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。

少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ヨークリッド。職業は、ハンターといったところかな。

各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしていいるらしい。

まだ高校生くらいの年齢だといつのこと、なぜそんな暮らしがしてゐるのか。気になつたが、そこまでは聞くことができなかつた。（もしかしたらこの国では普通のことなのかも知れないけど……）

え？ なぜ僕が彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかつて？

話は、僕が「ウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらつたところまでさかのぼるんだけど。

助けてもらつた後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、僕は笑いが止まらなかつた。

『何がおかしいんだよ！』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ！』とか、何やらわめいていたシーアだつたが、突然、笑つている僕に、綱でできた力ゴをかぶせてきた。

「わつ！ いきなり何するんだよ！』

「薪集めてこい！

はあ？ 薪？

全くわけがわからない。すると、シーアが言つた。

「仕事、手伝うつて言つたろ？

確かに言つたけど……。それは、都に連れていくてもう一つ交換条件として言つたんだ。

あ、あれ？ てことは……。

見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。

「一緒に行つていいの！？

「まあ、この際しようがないだろ

何がしようがないのかよくわからないうが、とにかく連れていくつてもらえることになつたようだ！

「さつさと薪集めてこいよ！』

そんなわけで、僕は彼と都に行くことになつたのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作つてくれたのだ。

シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、僕が集めてきた薪を使って、焚き火を起こし、あつという間にスープを作つてしまつた。

これが、すくすくおいしいんだ。きっと、いつも森で生活してるか

「いや、これは何と云はれてるんだかわづな。」

彼はさつきから、こっちの方を見向きもせずにスープを飲んでいるけど。

「ピーピー」

僕の肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行つた。

「お、お前も食つか？」

シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。

満面の笑みを浮かべて、すくなく楽しそうな様子だ。

そういえば、デコロワの二ヒを「かつら」

「動物が好きなんだね！」 そりいえは元々のことから嬉しいって言ってたな

僕が言つと、シアは僕がその場にいることを忘れていたかのよ
うに驚いた。

「ま、もあな

「さよ」と微笑んでいた後

聞こえぬが、聞こえぬ一うううの声、ハハハニ。

動物は裏切らない？

なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「ね、豊田も来へ、そろそろ寝るか」

シアは、先ほどの荷物から、薄い布を一枚取り出すと、それを
机の上に広げた。机の上に広げた。机の上に広げた。

「あれ、シアは寝ないの？」

てつきり、もう一組布を出すのかと思ったら、シアは木にもた

「ん？」
「ああ。俺は火の見張りだから」

そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちゃいけないんだ。

っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろうか…？ 僕も交代で見張った方がいいんじゃないか？

「当たり前だ。一時間したら起こすからな。わいせと寝る」

なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、僕はなかなか眠ることができなかつた。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎつて、落ち着かなかつたからだ。

母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかつたことになる。きっと、心配しているだろうな……。

そうだ、今日は見たい番組があつたんだつけ。母さん録画してくれているかな。

明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないのでかな？

眠れないな……。

ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかつたまま、顔を伏せていた。

僕が声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。

どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。

「シーア、ブネウマの鏡……って知ってる？」

意外にも、すぐに返答がきた。

「ああ、聞いたことがあるな。確か魔界と通じてるっていって……」「ま、魔界！？ 魔界なんてものが本当にあるの…？」

僕は、驚いた。思わず布団からはね起きる。

モンスターに、魔物に、魔界だつて？ 非現実的にもほどがある。

「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」

「その、モンスターとか、魔物とかつて何なの？」

「さつきから気になつて、いたことを聞いてみた。

「そんなことも知らねーのか？」

「だつてしようがないじゃん。僕の国にはそんなものいないんだから。

シアは、ため息混じりに、説明を始めた。

「いいか。モンスターつていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化したものだ。俺がさつき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」

「へえ……。でもアイツ、元は何の動物だつたんだ？ あんな動物見たことないぞ。

「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリップスつて呼ばれてる」

「そういえば、甲羅のよつた背中に雑草が生えてたつけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。

「対して、魔物つてえのは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

なんだか、ものすごい話になつてきただな……。

森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るといふ魔物たち。そして、その魔界と繋がっているといふ、プネウマの鏡……。この国は、僕の住んでいる世界とは随分と異なるようだ。眠れるわけないとつていたが、さすがに精神的な疲れもあってか、シアが話を終える頃には眠りに落ちていた。

もつとも、一時間後にはきつちり叩き起されたけど。

見張りを交代し、一時間後ほど経つたところで、再びシアを起

「じ、眠りについた。

「私たち一人きりで暮らす」としたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ

母さんが、ロバートとどこかへ行つてしまつ。

嫌だ！ 僕を置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！ 行かないで！」

やつた！ つかまえた……！

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかつた。
寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシーアだつた。僕は間違つて、シーアの上着をつかんでいたらしい。なーんだ。夢か。てつくり母さんが、僕をおいてロバートとどこかへ行つちゃうのかと思つた。

「それで、あとどのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、僕たちは早々に出発した。

「そうだな。あと二日つてとこかな……」

「二日あー？ もうちょっと早く行けないの？」

三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると捜索願いなんか出されちゃうかもしれない！

「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから

馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

ガサツ。

だしぬけに、森の中から物音がした。僕とシーアに、明らかに緊張が走る。

ガサツガサツガサツガサツ。

ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移つている気配がする。

トリップスではなさそうだ。もつと身軽なやつだ。

一瞬昨晚のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあるような大群ではないだろう。

「シーア……」

「しつ。黙つてろ」

見れば、シーアはとっくに口を構えている。

ガサツ！

ソイツが僕らの横を通りすぎた時、シーアが矢を放つた。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴つて落ちてきた。

シーアと共に、その物体に駆け寄る。

よく見ると、それは小さなドラゴンだつた。

いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだつた。

ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持つているが、手はないようだつた。

「コイツは魔物だな……」

そのドラゴン？ を見て、シーアが呟く。

そうか、魔物……。

魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。

それにしておかしい。確かシーアは魔物は夜にしか出ないと言

つていたはずだけど……。

「そなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることがある。これは何か、この国でおかしなことが起っていのかもしれないな……」

僕らはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。

辺りが夕闇に包まれた頃、僕らの目の前に一つの村が現れた。

「村だ！」

僕は歓喜した。疲れ果てて、もう一歩も動けそうになかったからだ。

今日は晴れていたといつに、僕もシアーアも雨に降られたよつて汗でびっしょりだ。

相変わらず元気なのは、鳥の『テューコクくらい』。ちえ、飛べるやつはいいよな。

ともかくこれでゆっくり休める……。

「さあて、ここいら辺でひと休みするか！」

そう言いながらシアーアが荷物を置いた『ここいら辺』とは、まだ村に入りきらない森の地面の上だった。

そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。

「む、村に入らないの！？」

僕が慌てて聞くと、シアーアはさも当たり前のよう答えた。

「言つたろ。俺は人間が嫌いだつて

「で、でも……！」

足が棒になつたように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだなんて。

「それに、宿に泊まる金なんかねーし
た、確かに……。

僕は家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもりえるよう交渉することもできたかもしけないが、もう僕にそんなことをする体力は残つていなかつ

た。

「じゃあ、僕も野宿する……」

僕は、心底がっかりしながら、了解した。

シアはそんな僕の様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

つづく

「……ノイア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まだだ。

うつすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとしたら……。

「エンノイア！」

僕は飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！ 今は僕が火の見張りをしていたんだった！ 寝ている場合じゃない！

よかつた……。火は消えない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日は僕が先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。

数分と経たないうちに僕は眠りこけてしまっていたのだ。

この国には、『モンスター』と呼ばれる、動植物が変化し、凶暴化した生き物たちと、『魔物』と呼ばれる、魔界から来る生き物たちがいる。

森の中だから、普通の野生の動物なんかもいるだろう。

そういう者たちに襲われないようにするため、火を焚き、夜通し見張りをしなければならないのだ。

僕は、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター『プレラス』というらしいのことを思い出して、身震いした。もう一度とあんなのには関わりたくない。しつかり見張らなきやな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシアーケーを見た。

焚き火に照らされる、シルバーブロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。

こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。

一時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。

……しかし彼は、僕と見張りを交代した後も、ときどき起きては僕の様子をうかがっていたのだ。

最初は、眠れないのかな、とか、僕が居眠りをしないか心配なんか、とか、思つた。

でも、次第に、僕を警戒してるっていうのかな……、僕があやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかつた。まるで、人間におびえる獣のように。

寝る時も決して短剣を手放さない。

普段は、ちよっぴり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。

けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。

そういうことが、シーアがこれまでたどってきた人生を物語つているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はばべつすり眠っているよう見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？ ちょっと待て。

じゃあ誰が僕の名前を呼んで、僕を起こしたんだ？

「ピピッ！」

僕が考えていると、どこにいたのか、デューコークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デューコークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、僕が森で道に迷っていた時。

なんどデューコークは、一度は離れたシーアを、呼びに行つてくれたのだ。

どういうわけか、シーアにはデューコークの言いたいことがわかるようで、僕が道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

僕には、デューコークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデューコークがあわてている理由がわかつたからだ。

「げえッ！？」

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても口を開けていられない。

あんなに頑張って見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！ とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴンに似ていた。

もちろん、大きさは全然違う。

片方の翼だけでも、僕の身長くらいはありそうだ。

「シーア！ 起きて！」

あわててシーアをたたき起こす。

しかし起こすまでもなくシーアはとっくに起きていた。

あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。

「魔物だ！ ワイバーンだ！」

シーアが叫ぶ。

そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、僕たちの頭上を飛び去つて行つた。

飛び去つた後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていつた。

「逃げるぞ！」

呆然と突つ立つていた僕の腕をつかみ、シーアが急かす。

僕たちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走つた。村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。

そう、ドラゴンが飛び去つたのは、村の方向なのだ！

そして、僕は信じられない光景を目の当たりにした。

村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。

先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで

熱気が伝わってきた。

熱氣にあおられて、森のざわめきが激しくなる。

一瞬にして、村は炎に包まれた。

人の気配すらほとんどしなかつた静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。

燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女、親とはぐれたのであらう子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなつた老人……。

懸命に家を消火しようとする者もいたが、とても意味のあることとは思えなかつた。

村が、文字通り地獄のように変わつてしまつたのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。

「あ！ シーア！ 女の子が！」

村の中央広場に降り立つたドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回つていた少女の肩をその鋭い爪でつかむと、少女をつかんだまま再び上昇し始めてしまつた！

「さらうつもりなんだ。大変！ 助けなきやー！」

僕はシーアの方を振り返り、そう言つたが、

「いや……助けても無駄だ、行こう」

なんとシーアはそう言つと、村とは反対方向に歩き出やうとしていた。

「無駄……だつて？」

僕は耳を疑つた。

見捨てるつていうのか！？

目の前で村が襲われているのに！？ 女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思ってた。

素直じゃなくても、人間嫌いでも。

なんだかんだで僕を助けてくれた。
それなのに……。

「そんなの納得できない！！」

僕は思わず叫んでいた。

シアアが驚いて僕の方を見る。

「弓を貸して！ 僕が助ける！」

僕はシアアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かつて構えた。

弓の弦が思つた以上にかたい。歯を食いしばりながら弓くのがやつとだ。

「お、お前、弓が使えるのか！？」

シアアが背後で叫ぶ。

「やつたことないけど……」

弓を一層強く引く。弦が指に食い込んで痛い。

「やるしか……ないだろ……――――」

叫ぶと同時に、僕は矢を放つた。

つづく

ヒュンッー！

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った。

……ドラゴンとは全然違う方向に。

当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、少女をつかんだま
まだ。

「あれ？」

「お前……下手だな」

シーアがあきれた声で言つた。

「貸せ。『』つていうのは『』つやつて射るんだ」

シーアは、僕から『』をむしり取ると、その纖細な外見からは想像
できないほど、軽々と『』を引いた。

そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。

ギャオオオウー！

ドラゴンは悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて少女を解
放した。

「あ！ 落ちるよー！」

少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に
落下してしまつたのだ。

「下は森だから大丈夫だろ。それより……来るぞー！」

シーアが言うよりも早く、怒りに狂つたドラゴンが、こちらに向
かつて突進してきた！

ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。

ドラゴンの鋭い爪が、田の前に迫つてきた。

身がすくんで、動くことができない。田を固く閉じ、身をかがめ、

ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。

一瞬、何かが覆いかぶさつてくるような感触がした。

ビュウウウウウウ。

よつやく、風がおさまつ、おれるおれる田を開ける。

?

特に、何事もなかつたよつだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。

だが、シアアはそうではなかつた。

苦しそうに息をつきながら、しゃがんでいる。

「くつ……」

「シアア！」

なんと、シアアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ掻かれていたのだ！

大怪我といつほどではないが、服が裂け、血が出ている。破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。肩に触れようとすると、うるせそうに払いのけられた。

「いいからお前はあの女を助けに行け！」

「シアアはどうするの！？」

まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……！」

ハア、ハア、ハア。

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。

村からは少し離れたところに落ちたよつだ。

ドラゴンは、再び村の広場のあたりを旋回していた。

下の方から、数本の矢が飛んでくる。

その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはつまくかわされた。

（シアアが戦つてゐるんだな）

村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。

と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。

あの女の子が履いていたものだ！

急いで草をかき分ける。

すると、落ち葉にまぎれて、一人の少女が倒れていた。思つた通り、さつきドラゴンにつかまつっていた少女だ。歳は、僕と同じくらいだろうか？ 金色の長い髪に、カチューシャをしている。

氣を失つてはいるが、幸い、目立つた怪我はないようだ。どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。

「あ……あなたが助けてくださったんですか？」

ありやりや。まいっただ。

そうとも言えるし、そうでないとも……。

とりあえず、僕はちやっかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、僕はあることについて考えていた。さつき、ドラゴンに襲われた時。

一瞬何かが覆いかぶさつてきたような気がした。

あれは、シーアが僕をかばつてくれたのだ……。

だから、僕は怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ搔かれてしまった。人間嫌いと言いながら、僕をかばつてくれる。少女を見捨てると言いながら、今こうして村のために戦つている。

僕にはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シーアは相変わらずドラゴンに矢を放つていた。

しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。何本矢が刺さるうが、全く動じていない。

ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。
炎を吐く氣だ！

「あーんママー！」

間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てきてしまった。

ドラゴンがそちらを振り向く。

「危ね……！」

シーアがとつとつに子供をかばつた。

ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！

「うわああああ！－！」

「シーア！－！」

背中に炎をくらつてしまつた。
がつくつとうなだれるシーア。

「村に他に戦える人はいないの－？」
さつき助けた少女に尋ねる。

「若い男は皆出稼ぎに行つているんです……村に残つてているのは女子供と老人ばかりで」

本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。
そんな……。じゃあどうしたら……。

突然、僕の脇からデュークが飛び出した。

そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かつて行く。

そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。

「デューク！ 何をする氣だ！」

案の定デュークはあつたつとドラゴンの翼に払いのけられてしまつた。

しかし、それでもめげずにまとわりつき続ける。

とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かつて軽く火を吐いた。

軽くといつても、デュークにとっては全身が包まれるほど炎だ。真っ黒になつたデュークが、広場に墜落してきた。

僕はあわててデュークを助けに行つた。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。嫌だ嫌だ！ デュークが死んじゃうなんて！

泣きそうになるのをこらえながら、そつとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。僕の顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。それを見て、なおさら涙が出そうになる。

「デューク！ どうしてあんな危ないことをしたんだよ…」
デュークを叱りつとして、僕はドキリとした。

デュークの目は、真っ直ぐ僕を見ていた。
まるで、何かを訴えかけるように。

僕には、デュークの言葉はわからないけど。
その目線の意味は、わかる気がした。

「デューク、お前……、まさか僕に戦えって……？」

返事をするように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そうだ、戦わなくちゃ！ 助けなきや！

村の人たちを。そして、シーアを。

だけど、どうしたらしい？

僕には、力も、武器もない。

何か良い方法はないだろうか？

あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。

そうか、これなら……。

アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙つて吐いている。
魔物は知能が高いのだと、シーアは言つていた。

僕は閃いた。

本当に、一か八かの方法だけど。
或いは、うまくいくかもしれない。

シーアは、新たな矢を取るつとして、もう矢が残つていないこと
に気がついた。

ドラゴンが、勝ち誇つたよつて、シーアに向けて炎を吐く準備を
している。

不意のことに、シーアは避けることができず、立ち戻りしていた。

僕は大急ぎでシーアを突飛ばし、かばつた。
ゴオオオオ。

もろにくらつことは避けられたが、熱気が背中に当たる。
背中が焼けそうなほど熱くなつた。

「エ、エンノイア！？」

シーアが目を見開いて驚いている。

僕は、シーアをかばうよつとして立つと、ドラゴンに向かつて声
高に叫んだ。

「やいワイバーン！ 村を焼くなんてずるいぞ！ 僕と正々堂々勝
負しろ！ 負けたら大人しく帰るんだぞ！」

シーア含めて、周りの人たちは皆『何を言つてるんだコイツは…
…』と言わんばかりにぽかんとなつてしまつた。

ドラゴンにこんなこと言つてもしそうがないと思つ
でもセリフはどうでもいいんだ。

ヤツの気が引ければ。

僕は方向転換して、ドラゴンを挑発するよつに走つた。
狙い通り、ヤツは僕の後をついてくる。
身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの中になつた。

そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。

今
だ
！

僕は、さつき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やつた！

突然のことには、ドラゴンは目を白黒させながら動揺している。

必死に足をハタつかせるか、丈太はトトロの口にビタリとしまつてるので、なかなか取れない。

たる、これでどうぬれやがれ

「ここで、僕は、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。僕にはドランゴンにとどめをさす手段がないのだ。

その時、ふいに鳥を叩かれ、声が聞こえた。

ノア・アダムス

シーアは腰のベルトから短剣を取り出すと、未だ暴れていのドワゴンの腹に突き立てた。

耳をいんぢくするな悲鳴が、村中に響き渡る。

カナヘイジ

さらにもう一撃加えようと、剣を構える。

と
その時
心には「これが墓にはかないかせん

翼に弾き飛ばされるシア。

エトランのまほ湯にあると、一気に飛び去ってしまった。

「ちつ、長い剣ならとどめがされたのに……」

シアーラがひとりごちた。

「シアーラ！」

僕はシアーラに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」

ポカッ。

あれれ、てっきり褒められると思っていたのに。いきなりこづかれてしまった！

「なんて無茶なことをするんだ！ 失敗したらどうするつもりだつたんだ！？」

再び手を振り上げた。またたかれると思い、とっさに田をつぶると……。

「……だけど。お前見かけによらず勇気あるんだな。感心したぜ」

シアーラはそう言って、僕の頭にふわりと手を置いた。そつと田を開けると、シアーラは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。この国に来てよかつた。シアーラに会えてよかつた……。

大げさだけど、僕は、そんな気持ちになっていた。

僕は笑って、シアーラとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。

避難していた村人たちのようだ。

あの少女が言っていた通り、村人の中には、老人と女子供しか見当たらなかった。

その中の、リーダー格と思しき初老の男が前に進み出た。

実のところを言つと、僕はちょっと不謹慎な期待を抱いていた。はつきり言つて、僕たちはヒーローだ。この村を救つたんだから。

だからきっと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰つたりして。そんな勝手な想像をしていた。

しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。
「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」

「見る。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」

そ、それはそうだけど……。

村が焼かれたのは僕たちの責任じゃない。

すると、その男は僕の隣にいたさつきの少女を見た。

「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰つてくれたかも知れんのに

……」

「そんなあ……！」

助けを請うように、シーアの方を見る。

しかし、シーアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、

「だから言つただろ？ 助けても無駄だつて」

そう言つて、村の外へと歩き出してしまった。僕も、村人たちに追われるようつに、村を出た。

あの少女が、物言いたげに、村を去る僕たちを見つめていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070v/>

aiolos

2011年10月9日03時27分発行